

パワハラ問題解決に向けて

福岡市人権問題に関する市民意識調査(平成29年度)の中に「尊重されていないと思う人権問題は何か?」という問いがあります。最も高かったのは、パワハラや長時間労働などの「働く人の人権」でした。

ここでパワハラに関していうと、その言葉自体が社会の中に浸透してきたのは、わずか数十年という短さですが、急速に問題化した背景には、職場におけるパワハラ相談件数の急増や深刻な人権侵害の状況があるからと考えます。

国も、今年の6月から大企業、2022年4月から中小企業においてパワハラ防止策をとることを義務付けた指針を昨年12月に正式決定し、企業への取組推進を促しています。

この問題の本質が正しく理解され、健全な職場環境づくりが円滑に推進されていけばよいのですが、実際には課題も多いのが現実です。中でも悩ましいのは、パワハラなのかどうかの判断が難しいグレーゾーンの問題です。その原因の多くは、パワハラを自己流に解釈していることにあると言われています。

厚労省が示した判断基準のキーワード「業務の適正な範囲」について正しく理解するとともに人権感覚を今後ますます高めていくことが強く求められていると考えます。

(中村)

新しい時代に求められること

令和になって初の年末年始。新しい時代の未来を感じる2つの出来事があった。

一つは大晦日の紅白歌合戦での紅組トリのステージ。MISIAさんの圧巻の歌声と共にステージいっぱいにはためいた沢山のレインボーフラッグ。LGBTQの象徴であるこの旗が、このような国民的番組で、「性の多様性」という強いメッセージを発信したことに、新しい時代を象徴する歴史的な1シーンを見た思いがした。

もう一つは、ある本屋さんでのこと。目に飛び込んできたのは、「本屋大賞2019ノンフィクション本大賞」を受賞した黄色い表紙の本「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」。英国の「元・底辺中学校」に通う「ボク」が人種差別や貧富格差、性の多様性等と向き合う姿勢が描かれている。周囲の客がこの本を手取る姿に、社会の多様性への関心の高まりを感じた。作中で、「(多様性って)楽じゃないものがどうしていいの?」と尋ねるボクのシンプルだが核心を突く質問に、母ちゃんはズバリと答える。私だったらなんと答えるだろう。

多様性がなぜいいのか、この問いに対して社会として明確な答えを持つこと。それこそが新しい時代に求められる次のステップではないだろうか。

(吉田)

ココロンセンター ライブラリー おすすめDVD

「職場のパワーハラスメント」をなくすためのおすすめDVDを紹介します。

職場の日常から考えるパワーハラスメント(28分)

ある企業の人事部に飛び込む様々な問題をドラマスタイルで描き、4つのエピソードで展開していきます。

パワハラだと勘違いする部下、過度な期待を寄せる上司、先輩からの嫌がらせ、部下から上司へのパワハラなど、パワハラなのかそうでないのか、線引きが難しい事例を中心に描かれています。それぞれの立場から、パワハラをなくすためにどうすればいいのか、考えるきっかけとなるDVDです。

企画・制作・・・東映株式会社 教育映像部 通常版・字幕版同時収録



「ココロンセンターだより」No.79 発行：令和2年3月 福岡市人権啓発センター
〒810-0073 福岡市中央区舞鶴2丁目5番1号健康づくりサポートセンター(あいれふ)8階 TEL092(717)1237 FAX092(724)5162
E-mail:jinkenkeihatsu.CAB@city.fukuoka.lg.jp

ココロンセンター 福岡 検索



TEL092(717)1247(人権啓発相談室では人権問題に関する相談及び、研修会や学習内容に関する相談を受け付けています)

CONTENTS「主な内容」

- あなたはいくつ知っていますか? 1P
- 人権啓発地域推進組織の取組紹介..... 2P
- 多様性を受け入れる器作り・心のバリアフリー 3P
- 人権啓発推進指導員のコーナー・おすすめ DVD 4P



あなたはいくつ知っていますか?

これらは『ピクトグラム』といえます。「絵文字」や「絵単語」などと呼ばれるもので、文章で表現する代わりに、視覚的な絵(図)で表現することで、言語に制約されることなく理解できる目的で使用されています。

主なものをいくつか紹介します。
あなたはいくつ知っていますか?



【答えは2ページに】

人権啓発地域推進組織の取組紹介

博多校区奈良屋人権尊重推進協議会

博多校区奈良屋人権尊重推進協議会は、平成12年度に設立され、毎年、さまざまな人権問題について講演会や研修会を行ってきました。一人でも多くの人に関心を持ってもらいたいという思いから、チラシやハガキで講演会などへの参加を呼びかけてきました。

しかし、どこか他人事で自分たちの問題として受けとめていないことを感じていました。このままではいけない、もっと自主的に積極的に取り組むにはどうしたらいいのか、日常の中に何か気づきを促すことはできないのかを考えていました。

そのきっかけとなったのが、演劇ワークショップです。

はじめは、まちづくりの問題提起や高齢者の「振り込め詐欺防止」の問題を「仁和加」を通して伝えていました。さらに、演劇手法で啓発できれば、と考えていた矢先に、福岡市文化芸術振興財団から奈良屋公民館講座として開催してみませんか、というお話があり、平成23年度から「50歳からの演劇講座」の取組をはじめました。演劇に関心の薄い50代以上をターゲットに、観るだけでなく演ずる楽しさを感じてもらおうという試みでした。「この歳で演劇と思ったけど、とても楽しかった!」という意見が多かったので、平成24年も引き続き開催しました。この経験から「演劇を通して本格的に人権問題に取り組みたい」という思いが強まり、平成25年度からは「劇団HallBrothers」の幸田真洋さんたちに指導をしていただき、公民館地域人材発掘・育成事業「50歳からの演劇ワークショップ」へとつなげていきました。

脚本をなかなか覚えきれない人たちがばかりのシロウト集団ですが、人権劇「ランドセルと人生の色」「普通のおでんの作り方」を創作し、平成27年6月30日の人尊協総会で旗揚げ公演をしました。その時、劇団名は「やらの劇団」としました。

総会当日、演者の顔を見知っていることで、参加した校区の皆さんは、関心を持って内容に耳を傾けてくれました。身近な知り合いが演じる寸劇を通して、人権問題が特別ではない日常生活や心の中にあることに気づき、みんなで考えるきっかけになったと考えています。その成果は、寸劇を観たあとのワークショップにおける意見交換の場で、これまでにないくらい活発な意見が出るようになったことから実感できました。そして、平成28年12月には、博多区

「人権を尊重する市民の集い」における報告を依頼され、これまでの経過の紹介と共に、新作「みんなって誰?」「本日はお日柄もよろしく」を演じることができました。

私たちのシナリオの特徴は、「あなたも考えてみませんか?」という雰囲気のエンディングにすることです。様々な考えや思いを持った校区の皆さんに、決して「押しつけ」をするのではなく、一考をうながすようにしています。そして、次回公演に向け、新たなシナリオに取り組んでいる「やらの劇団」です。



左から、半田人尊協会長
福本公民館主事、西頭公民館長



人権を尊重する市民の集いで公演から

~1P目の答え~

- ①【病院】
- ②【薬局】
- ③【障がいのある人が使える設備】
- ④【銀行・両替】
- ⑤【優先席】高齢者、障がいのある人・けが人、内部障がいのある人、乳幼児連れ、妊産婦
- ⑥【オストメイト】様々な病気や事故などにより、お腹に排泄のための『ストーマ(人工肛門・人工膀胱)』を造設した人が使える設備。
- ⑦【リサイクル品回収施設】



福岡法務局・福岡県人権擁護委員連合会主催 第39回全国中学生人権作文コンテスト福岡県大会奨励賞



「多様性を受け入れる器作り」

先日、母が自治会の集まりで、「アスペルガー症候群」をテーマにした、人権啓発ビデオを見たそうだ。この障がいを持った人は、相手の気持ちを察するのが苦手で、「慣習的な暗黙のルールが分からない」「会話で、冗談や皮肉が分からない」といった特徴がある。しかし、知能や会話能力は高いので、他人から見てすぐには分からない。

私はこれまで、この障がいについて知らなかった。話を聞いた時、このような「目に見えない障がい」について知らないままでいることは怖い事だと思った。なぜなら、本人が真剣に取り組んでいても、端から見ると「空気が読めない」「手を抜いている」ように映ってしまい、トラブルが発生する可能性があるからだ。

今回思ったことは、「普通と感じる感覚」や「常識」は一人一人違う、ということだ。何がよくて、何がいけないという判断基準は、その人が生まれ持った素質と生まれ育った環境で決まると思う。素質と環境が自分と全く同じ人などこの世にはいないのだから、違いがあるのも当然だ。

しかし、人間は自分と違う人を、「変わっている人」とレッテルを貼る。例えば、人と接する時、「空気が読めない」「冗談が通じない」「話し方が変」「会話が続かない」など、気まずさを感じることは誰にでもあ。こうした違和感は、「キモい」という言葉もあるように、いじめの一因になっていると思う。

自分の物差しで相手を判断してしまい生じる違和感、さらにその物差しに収まるよう強要することによるいじめの連鎖をどうしたらいいのだろうか。

物差しは英語でスケールと言いたい。スケールが大きい人、すなわち器の大きい人に私は憧れる。自分の器が大きければ、たくさんの人に共感を示し、優しく受け入れることができるのではないかと。

そのためには、アスペルガー症候群のような「目に見えない障がい」について知っておくことは大切だと思う。他にも、認知症や聴覚障がい、性同一性障がいなど、一見しただけでは気づかないけれど、違いによって困っている人は、私たちの身近にはたくさんいるからだ。

そして、障がいはないとしても、人による考え方の違いは必ずある。日頃から勉強や読書によって知識を増やし、実際の人との出会いを通して様々な考え方に触れ、自分の器を、視野を少しずつでも広げていく努力を重ねることが必要だと思う。

一朝一夕でできるような簡単なことではない。一生かけてする修行のようなものかもしれない。それならば、せめて自分の小さな物差しに合わせるよう相手に強要しないようにしたい。共感や理解は難しくても、除外はしない。これなら今日からできると思う。

人権問題の解決に向けた 「心のバリアフリー」というキーワード

2015年9月に国連で「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択された。掲げられた持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals)はSDGsと呼ばれ、世界全体で、2030年までに誰一人取り残すことなく、貧困・格差の撲滅など持続可能な世界を実現させようという取組目標である。

国は2030年までを「行動の10年」とする「SDGsアクションプラン2020」を策定したが、「あらゆる人々が活躍する社会の実現」に向けて「心のバリアフリー」の推進を掲げている。

この「心のバリアフリー」の必要性は、昨年12月の本市「人権を尊重する市民の集い」で、ピーターフランクル氏や大胡田誠氏など講演者からも聞かれた。日本は、ハード面でのバリアフリーは進んでいるが、欧米など諸外国では普通に行われる、困っている人の気持ちを思いはかって笑顔で手を差し伸べるとい「心のバリアフリー」が立ち遅れているというものだ。障がい者にどう接していいかわからないという声も聞く。

何も「心のバリアフリー」は障がい者だけに向けられるものではない。ふれあいの中で、お互いを知り、尊厳をもつ同じ人間として接するという事は、様々な人権問題に通ずるものがある。双方向の「心のバリアフリー」は、人権問題の解決に向けて、重要なキーワードの1つであるように思われる。

福岡市人権啓発センター 所長 古藤 直樹